

久留米の自然



2007年10月1日 第98号 ポロポロノキの実を吸汁する雌成虫(左) 撮影日2007年5月28日
撮影場所 高良山飛雲台 ベニツチカメムシの親子(右) 撮影日2007年6月29日 撮影場所
耳納スカイライン沿い 撮影者 行徳 直久

ベニツチカメムシ

行徳 直久

高良山は、珍しい生物を発見したり観察させてくれる、私にとって楽しい山である。

今年の春にポロポロノキを高良山の飛雲台でみつけたので、5月下旬の実がなる時期にベニツチカメムシが来ていないか暇を見つけては観察に出かけた。

5月27日ポロポロノキの枝にいる3頭と地上を這っている2頭を発見した。1頭は、実に止まって、その実に口吻を刺して吸汁中であった。

この虫は集団の中で交尾した後、雌がこの実を吸いに来て卵巣を成熟させて産卵後、抱卵・子育てをするという報告を読んだことがある。

雌雄の確認のため捕まえると、ジイジイと音を出したが特に臭いは感じなかった。

その後、6月10日過ぎ頃からベニツチカメムシの姿は産卵のためか、一時見られなくなった。

6月29日、ツツジ公園から約3km行った耳納スカイライン沿いで、ポロポロノキの実が沢山落ちていた所を見つけた。樹下を探すと斜面の落ち葉の下でベニツチカメムシの親と2齢幼虫群と一緒にいるのを数か所みつけた。

付近には、卵を抱いて移動する成虫や、ポロポロノキの実を取り合っている成虫、実に口吻を刺して黙々と運んでいる成虫等がみられた。

ベニツチカメムシは、落ち葉の下に簡単な産室を作り、自分の産んだ卵塊や孵化した幼虫を守ることが知られている。さらに、幼虫に唯一の餌であるポロポロノキの実を運んでくるともいわれている。そのような場面をこの目で見る事が出来て大変幸運であった。

その後も幼虫の生態を観察したので、気がついたことを次に書き留めておく。

雨がひどく降ると、林下の幼虫はヒサカキやシダ等に蟻集し、じっと雨宿りをしていた複数の幼虫が4m位の樹上で吸実していた踏まれて砕けた実の胚乳からも摂食していた共食いは3~4頭が1頭にたかり、その幼虫は完全に吸い尽くされぺちゃんこになる。餌があってもかなりの頻度で共食いが観察されたオサムシが数頭徘徊していたが双方とも全く無視している(曇天の昼間の観察)

久留米市の蝶 37

サツマシジミ

国分 謙一

高良内町の西鉄バスの終点の竹の子から高良川に沿って杉谷集落まで、秋の季節を観察しながら行くと、木立の上や湿った場所で、小さな青白色の蝶が飛んだり集まったりしていますが、よく似た別の蝶がいるため区別は慣れないと難しい蝶です。

日本では東海地方から四国までの太平洋沿岸、瀬戸内海周辺、九州に生息しています。

青白色と白い紋が調和し、きれいな蝶ですが季節により色彩に変異があり、4月に発生する春型はそれ以降に発生する夏型に比べると、全体に白斑が広がり特に美しく感じられます。

薩摩の名

薩摩国(鹿児島県)で最初に発見されたので、サツマのシジミ蝶となったものです。日本の蝶の和名には地名を使用したものも多くありますので図鑑などで調べると、蝶の発見地や主な生息場所が分かるはずです。

久留米が最初

福岡県で最初に発見されたのは久留米市です。自然を守る会の初代会長であった、梅野明氏が1927年(昭和2年)8月に高良山で採集し、翌1928年にも英彦山で採集したとして発表されました。昭和30年代までは福岡県での産地は少なく、発見したら昆虫専門誌に報告されるほどでしたし、また、確実にサツマシジミを採集できる場所として、遠くから高良山にいられていたようです。私が昆虫を始めた昭和30年末頃は高良山では一度に多数は見ないが、あちらこちらで少数見ることができる程度のやや珍しい蝶でした。

棲息の拡大

昭和の初め頃の図鑑には、分布としては九州に棲息し余り多くないとされていて、本州では1932年(昭和7年)に広島県の宮島で記録されたのが最初です。1950年(昭和25年)の昆虫専門誌にも九州と四国に産し、本州は宮島の1回の記録しかなく、少ない蝶として記述されています。しかし、その後少しずつ分布を拡大し、現在では静岡県周辺まで記録されています。この蝶の仲間には南方系なので今後とも分布を北へ

拡大するものと思われます。

学生の活躍

生物の観察は誰でもできます、特に昆虫の標本は今では夏休みの宿題で作成することは殆どありませんが、昭和40年前半頃までは、市内で開催されている小学校の夏休み作品展にも多く出品されていて、時々珍しい昆虫がありました。日本の昆虫にはこのような作品展から発見されたものも多くあります。また、全く不明であったサツマシジミの卵の形や幼虫の食草、生態が分かったのも高校生が調べたものですし、他にも会誌82号のウラナシジミもその一つです。各地に棲息する昆虫の分布が判ったのも学生等が調べたものが多く、現在の図鑑の記述の大半はそういう学生の努力の結晶があったからできたものと思っております。日本の昆虫では生態が不明なものが非常に多く、まだまだ知られていない事項があり、あなたの観察が図鑑の記述を変えるかもしれません。

久留米市での観察

久留米市では高良山などの山間部では多いのですが、平坦部では殆ど見ることはできません。4月中旬から10月まで谷川沿いの小さな樹木の花に吸蜜に来たり、湿った場所(春と初秋が多い)では吸水(特にオシッコをして放置しているとよい)に来ています。

飛び方はそんなに速くないのですが、よく似た別の種類の蝶がいて、慣れないと判別できませんので、一度捕えて図鑑で確認されたがよいと思います。飛んでいるときは、やや白っぽく見えるので区別できます。



メス



オス

柳坂曾根 櫛並木 福岡県指定天然記念物**高山 美子**

櫛並木の現状を2007年4月に調査。写真でも記録を残した。大石道義、橋田沙弓 高山美子の3名。

櫛成木には、緑色の標識に番号が書かれ、地上約1.5メートルくらいの幹の部分に取り付けられている。

途中補植されたとみられる若木にはオレンジ色の標識であった。番号は1から198番まであった。NO.105番は見当たらなかったが、2007年9月にはひこばえが出ていた。オレンジ色標識の木34本、緑色標識の木164本、計198本

写真 柳坂曾根 櫛並木

撮影日：2007年9月6日

撮影場所：久留米市山本町豊田

撮影者：高山美子



昭和39年5月7日指定

畳半畳の水たまり～つながる命～**松永 紀代子**

小都市三沢の簡保レクセンター跡地の小さな水たまりを行くたびに覗く。

夏、干からびかけると夕立で湿気をとれどもどす。雨量が多いと、テニスコート半分ほどの湿地になる。ハラビロトンボなどが産卵しているが、強い日差しで再び畳半畳に。

秋、ヤゴが何かを捕食していた。晴天が続くと、アオコが目立つ。ミジンコも沢山いる。

冬の雨の夜の翌日にはニホンアカガエルの卵塊が見つかる。多量に孵化するオタマジャクシは羽化の近い肉食性昆虫にとって貴重な蛋白源であろう。アメンボやヒメガムシなどもいて、巻き貝も底の落ち葉を這っている。

5月の連休の頃、干上がることが多くなる。垂成体となったアカガエルもいるが、底に重なるように横たわった沢山のオタマジャクシは野鳥の餌にもなっている。

梅雨になりまた水がたまり、ヌマガエルなどが産卵する。湿地が広がり、側溝の水があふれると、スジエビなども住人となる。これらの住

人もまた日干しになるものもあり、コオロギなどの雑食性昆虫に食べられたりする。干上がって白くなったアオコは日よけがわり。はぐると中は湿っていて、黒々とした田んぼの土のようだった。もぞもぞと薄茶色のものが動いた。ケラの幼虫だった。

水たまりは、まさに生命の揺りかごである。



写真上からニホンアカガエル、干上がったオタマジャクシ、野鳥の足跡

三国丘陵の自然を楽しむ会ブログ

<http://mikunikyuryo.blog107.fc2.com/>

生き物に魅せられて その37

ヒメクダマキモドキの巻 松永 紀代子

2006年10月、夜の庭の観察にこっていた。カナヘビの子がススキの葉の上で眠っていたり、小さなハマキガの幼虫がコナラの新芽から顔をのぞかせていたり、ライトに浮かび上がった生きものは神秘的でさえある。

カンタンやマツムシの鳴く中、グミの幹をふと見上げた時、ヒメクダマキモドキが止まっているのに気が付いた。ウン？ 体を丸めている。ひょっとして・・・産卵だ。あの反り返った産卵管をどのように使うのか前から不思議に思っていた。彼女は本当にゆっくりとした動きで幹を吟味しているようだ。そして腹をまるくして口の方に寄せ産卵管を幹の縦にはいったヒビの中に差し込んだ。1卵生み終えたのか、少し歩を進めまた産卵。何度かのフラッシュで彼女が私の方へ向きを変え、じっと動かなくなった。なんだか迷惑そう。そうだね、じゃましちゃいけない。そっと幹のそばを離れた。

ひととき 動物笑い話 その43

ナマケモノ

「入園者はほとんど前を素通りして行くね～」りゃ仕方ないよ～。夜行性だし～、動作が緩慢だから～」「でも～、それはコアラと同じよ～」「名前が良くない～」「そうね～、差別用語よ～。人間の与太者(ばか者、怠け者)とは違って～、私達はスローライフに徹しているだけなのに～」「環境にも優しい生き方をしているから～、悠然～とか泰然～とか格好いい名前に変えて欲しいね～」

「しかしコアラがもてて～、なぜ私達がもてないのかな～」「顔はまあまあだが～、大きな鉤爪を持った長い手や毛深さがマイナス面かも～」「ふう～、少し話し疲れたし～、聞き疲れた～。もう～、休みましょう～」

*ナマケモノ科に属する哺乳動物の総称で、熱帯アメリカに分布する。ブラジルに生息するミツユビナマケモノは体長約60cmで、灰褐色の長毛に覆われる。(Y. Y)

郷土の樹木2

ポロポロノキ 猪上 信義

ポロポロノキ科の落葉小高木で樹高は5~10m。九州、琉球列島、中国の暖地に自生します。樹皮は灰白色で滑らか、枝はジグザグに曲がり、折れやすく、節がふくれます。一年生の細い枝は、秋に葉とともに落ちます。葉は卵形または長卵形、縁に鋸歯がなく、長さ4~8cm、幅3~4cm、基部は丸く、先は長く尖ります。4月ごろ、若い枝の脇から穂状の花序を出し、先に黄白色の小さな花を数個つけ、いい香りがします。果実は核果で楕円形、長さ8mmで、秋に赤く熟します。

日当たりのいい乾燥した林内や林縁に生育し、県内では筑後川より南の海拔500m以下の山野ではよく見られますが、これより北では次第に少くなり、宇美町の四王寺山付近より北ではまず見られません。県外では長崎県対馬や岡山県などにも分布するという情報がありますが、連続的な分布では本県が北限域といえます。ポロポロノキ科は世界で200種以上知られていますが、そのほとんどは熱帯地域やオーストラリアに分布していて、これ一種だけが日本にまで北上しているのです。和名は細い枝が秋に葉とともに落ちることからついたと思われます。久留米市では高良山周辺の林内や林縁には多く、時に樹高8m、幹の直径30cmほどの大きな木も見られます。

この木は材がもろく、特に用途はありませんが、生物多様性の観点からは非常に重要な植物です。それはベニツチカメムシという昆虫がこの植物に全面的に依存しているからです。これは体長16~19mm、真っ赤な体に黒い斑点をもつ美しいカメムシで、6月初め頃落ち葉の下に産卵します。その後雌は卵がふ化するまで周囲で見守り、ふ化した後も餌を与えるなどの面倒を見ます。そして幼虫はポロポロノキの実の汁を吸って成長します。その後何百匹もの集団で、木の幹、枝先、落ち葉の下などに群らがり、人が近づくとザワザワと警戒音を発するので、気づかれた人もあるでしょう。

このようにたった一種類しかない、しかも北限域の植物に依存しているため、ベニツチカメムシは福岡県の準絶滅危惧種に指定されています。

なお、今回から表題を「郷土の樹木」に変更しました。

高良川流域のキノコ(その4)

角 正博

前回は、子囊菌類の中で子嚢果(子嚢を形成する子実体)として子嚢盤(表面に椀状~皿状の広く露出する子実層が形成されたもの)を形成する盤菌綱を取り上げました。中でもチャワタケ目のキノコを取り上げました。今回は、盤菌綱の中から、ピョウタケ目を紹介します。

7. ズキンタケ(頭巾茸) *Leotia lubrica* f. *lubrica*

ズキンタケ科ズキンタケ属に属しています。高良山では、かつては高良川の支流であったと考えられる一木谷の支谷で7月上旬に発生しています。本稿のタイトルは「高良川流域のキノコ」としていますが、高良山を含めたエリアまでを対象と考えていますので、一応ここで触れて置きたいと思います。林縁路傍の地上に20本程度が群生していました。傘の色は黄土色から一部あるいは大半が黄緑色がかったものまでさまざまです。黄緑色がかったものは、まるで藻類が付着したかのように見えます。傘の形は、膨れて類半球形、表面には不規則なしわがあり、傘の縁は内側に巻き込まれます。柄は黄土色で長さは1~3.5cm程度です。筑後地方では夏季に、平野部の農村の、樹木が多く比較的空中湿度が高い神社の境内でも見かけたことがあります。

8. ピョウタケ(鉾茸) *Bisporella citrina*

ズキンタケ科ピョウタケ属に属しています。ピョウタケ(鉾茸)とは、よく言ったもので、子実体は皿型で短い柄があります。皿型の子嚢盤は直径1~4mm程度で、橙黄色です。高良川流域では、梅雨時あるいは夏季のまとまった雨が降った後に、陰湿な林内の落枝上によく群生しています。

次に子嚢果(子嚢を形成する子実体)として硬い子嚢殻を形成する核菌綱の子嚢菌です。核菌綱には、サナギタケに代表される麦角菌目やマメザヤタケ、クロコブタケなどを含むクロサイワイタケ目等があります。

9. サナギタケ(蠅茸) *Cordyceps militaris*

寺尾谷で、トビイロスズメという蛾のさなぎに寄生した「冬虫夏草」の一種サナギタケを採集したことは、すでに会報第77号で報告をしていますので、ここでは詳細はそちらに譲ります。「冬虫夏草」とは、主に昆虫等から生ずるキノコの総称です。養分を寄生した昆虫等から得て生育し、そ

の体内で菌糸の塊である菌核を形成すると、やがて昆虫の体を突き破って生ずるキノコ(子実体)です。この「冬虫夏草」の名称は、中国で起こり、冬は虫で動き回っていたものが、夏になると草(キノコ)に変わるという発想からできたものです。古来中国では、「天地自然が万物を生み、陰陽の二気の消長がこれを育てる」という陰陽五行説の思想から、「冬虫夏草」は尊ばれました。サナギタケは偶然発生するものではなく、過去にサナギタケが発生したところの腐植土を持ち帰り、実験室で飼育したサナギを埋め込むと、サナギタケを釣り出せることから、「菌は腐植の中に存在」(社団法人日本林業技術協会編、『きのこの100不思議』、1997〔平成9〕年2月24日、東京書籍)し感染したもので、寺尾谷では毎年発生していたと考えられます。しかし、残念ながら杉谷一般廃棄物処分場の建設によって、寺尾谷のサナギタケはもはや見ることはできなくなりました。

別の「冬虫夏草」の一種の場合、昆虫に感染後、「約50~150日」かかって、死ぬまで菌は血液の中で「菌糸をつくらずに、ハイファルボディ(分節菌体)という特別な酵母状の形に変身して増殖し、徐々に昆虫を弱らせていき、死亡後は再び菌糸に戻り、キノコ形成が始まるそうです。「冬虫夏草」は寄主を腐敗させずにミイラのようにして、他の細菌を寄せつけずに菌糸を増殖させる力を持っています。そこで近年は、盛んに臨床的研究が行われ、これによって「冬虫夏草」の抽出物質の持つ免疫抑制効果、抗癌作用が次第に明らかになってきましたが、これらは「冬虫夏草」の進化の歴史と深く関係していると考えられています。中国では「蛾虫草」と呼ばれ、「冬虫夏草」の一種「支那冬虫夏草」*Cordyceps sinensis* とともに昔から不老不死、強精強壯の秘薬として重用され、結核、慢性喘息、慢性気管支炎、慢性腎炎などの薬として用いられました。日本においても生物界の珍奇な現象として、江戸時代から一部の本草書に登場しています。筑後地方では薬用に供された記録として、八女郡から産出するカメムシタケ *Cordyceps nutans* を「フウノトウ」の名で肺病や肋膜炎の秘薬として市販していたことが、梅野多喜蔵編『筑後地誌略』(1879)にあるそうです(八女の郷土史研究家、故江下淳氏のご教示)。

キャンパス周辺の昆虫

米田 豊

自然観察は遠出しなくても、問題意識や好奇心が有れば身近な所で出来ます。今回は私が勤務する久留米大学医学部(久留米市旭町)に見られた昆虫たちを紹介しましょう。

限られた敷地内で建物の新築や改築が相次ぎ、植栽されていた樹木が長年の内に大幅に減少した事や周辺部の宅地化や駐車場化により、キャンパス内で見られる昆虫も大幅に減少し、単純化しました。

筒川沿いのサクラ並木で私は開花日の記録を取り続けていますが、夏になるとクマゼミ、アブラゼミの一大発生木になり、初秋になるとモンクロシャチホコの大発生を許して、紅葉を待たずにして丸裸になります。近年はキマダラカメムシやヒロヘリアオイラガをよく見かけます。

大きな幹が折れ、ヤドリギが寄生した古木のエノキの樹冠ではゴマダラチョウ、テングチョウやタマムシが飛び交い、時にはその死虫体を手に入れる幸運に恵まれます。かつてはアオバズクが飛来していたこの大木も余命わずかな気がします。

近くに筒川があるので、ハグロトンボ、アオモンイトトンボ、シオカラトンボなどが見られ、ハグロトンボを基礎1号館の建物内で見つけた時はさすがに驚きました。クロコノマチョウの建物迷入もありました。

毎年夏になると本部横の小さな空間の地面でクロナバチの営巣が見られます。今年は個体数が増えて穴掘りの場所が拡大し、狩りに出かけてはキリギリス科の獲物を持って帰ります。その行動は本当に見ていてあきないものです。

クスノキの大木もあるので、それを幼虫の餌とするアオスジアゲハも良く見かけ、アラカシにはムラサキシジミ、カエデにはミスジチョウ、ハマヒサカキにホタルがなど色々見る事が出来ます。

先日、研究室で私にとって初めてのウシカメムシを採集しました。食草はアセビ、ミカンで、希れとの事。どこから来たのでしょうか、不思議です。職場での貴重な出会いです。

例会報告

第345回例会 ホタルの夕べ

河内 俊英

今年もホタルの夕べを開催できました。高良内・一之瀬に親水公園がつくられ、高良川のホタルが久留米市の広報により広く市民に宣伝されるようになりました。しかし、これまで当自然を守る会が「ホタルの夕べ」を開催しても市政久留米でおしらせに掲載することはしませんでした。また久留米市はホタルの名所を紹介するときも、高良川のホタルは全く公表されることは無かったのです。

なぜなら、杉谷最終処分場建設に対して、ホタルの名所がマイナスに働くことを懸念したからです。ホタルは各地で川の環境指標としてシンボリック生物になっており、清流に処分場を造り、ホタルが減る懸念を市民に知られなくなかったようです。ホタルの夕べは、当初の目的をはたし新たな段階にはいったと言えるでしょう。

ホタルは、甲虫類に属する昆虫で、その一生は、卵・幼虫・蛹・成虫とかたちを変化させていきます。成虫は、交尾し卵に種をつないでいきます。ホタルの中でも、幼虫の時代を水の中で生活するのは、世界的に見てもゲンジボタルとヘイケボタルだけだそうです。

ホタルの発光:生き物にも光を出すものがあり、ホタル、ホタルイカ、ヒカリコメツキなどは体内で物質が反応して発光します。このような生物発光がきちんと調べられたのは、100年ほど前にヒカリコメツキがもつ発光組織から発光酵素と発光物質が見つかったのが始まりです。ホタルの場合は、ホタルルシフェラーゼとホタルルシフェリンによって発光します。この発光周期に方言があり、東日本型と西日本型で全く異なることが知られています。



河内副会長のホタルの話を聴く参加者

第346回例会 キノコと自然観察会

6月24日(日)高良台松葉諏訪池周辺にて行いました。当日は雨模様でしたが12名の方が参加され、金子周平先生の指導の下、たくさんのキノコを観察しました。観察終了後、参加者でキノコ汁をいただきました。尚、当日観察したキノコのリストを金子先生に作成していただきましたので別紙として添付します。(N・K)

きのこ自然探訪ときのご汁会

行徳 美千代

「きのこ狩り」と聞いて、ちょうどダイエットしなければと考えていた私は、歩いてカロリーが消費でき、その上にノンカロリーのキノコが収穫できるとは、なんてラッキーなことと思ひ、連れ合いについて小雨模様の中を参加した。

集合場所に着くと、会長さんが長靴まで用意して下さっていたのには、感激した。

講師の金子先生から、「きのこは、赤松やコナラに多い」と聞き、探しはじめた。まず、マッシュルームに似たホコリ茸をみつけた。これは、汁物に入れたらおいしいと聞く。銀色で透明感のあるヒトヨ茸は、梅雨時の雨上がりに出てきてその日の内に溶けてなくなるそうだ。アラゲキクラゲは、中華料理などに使われているキクラゲの仲間今回たくさん採れた。昼食にはこのキクラゲを加えたきのこ鍋と、きのこご飯に舌鼓を打ち、ついといおかわりまでしてしまった。とても満足な、そして満腹な一日であった。

当日みつけたキノコを描いてみました



久しぶりのキノコ観察は、楽しくておいしかったです。

松富士 将和

梅雨の最中のキノコ観察会は、いつも天気予報とにらめっこ。今年も、朝、目を覚ますと土砂降りの雨。出かける頃は少し小降りになったものの「中止だろう」と、思い、カメラも、双眼鏡も、おまけに筆記具まで持って行かなくて、橋田会長の「キノコ飯にキノコ汁をいっぱい作っていますから、雨でもやりますよ。」の一言で、長靴を借りての参加となる。

雨は止んだもののじとじとと暑い。藪の中に入れないので、収穫は少ない。ナラタケや「そうそう、タマゴタケを多良岳で見つけたのは今頃だったな」とおいしいタマゴタケ(テングタケ科、テングダケ属で、一見毒キノコであるが、サラダにするとお・い・し・い)狙いで落葉樹の古木の幹や根元を探すが、無い。が、それでも、久しぶりのキノコ観察会は、勉強になり、楽しい。

橋田会長が準備されたキノコ汁に収穫したアラゲキクラゲを入れ、キノコ飯と一緒に頂く「キノコ御膳」はおいしい。

指導頂いた金子夫婦、キノコ御膳を準備していただいた橋田会長に厚く御礼申し上げます。

「きのこの出会い」

金子 真由美

今年のきのこ観察会も、天候に恵まれず、残念だった。しかし、きのこは雨を必要とするのだ! 年に何度か、水分と温度のタイミングが合った時、この演習場のあちらこちらに、いろいろなきのこがいっせいに顔を出す時がある。

あれは、十年程前の八月下旬のこと。なにげなく通勤途中の自衛隊の演習場の道に車を止め、ヤブの中に目をやった時、なんとアンパンの二倍程もあるきのこが出ていた。足をふみ入ると、そこにもここにも、重なり合い連なり合い、ポコポコ出現していた。

毎日、演習場の東に西にと、ひとりガサガサとやって遊んだ。まっ赤なベニタケ類やまっ白なシロオニテングタケのかわいい幼菌のきのこに出会っては、ニンマリとしていた。

しかし、十日ばかりすると、きのこたちはピタッと姿を消した。土の下の菌糸の元へもどってしまったのだ。「おーい。」と呼べども(?)あんなににぎやかだったヤブや林床は、シーンとして静かになって黙ってしまった。

今でも時々、この演習場をうろついて、会いたい人(きのこ)に会いに行く。いや、子どもにもどって宝さがしをしている。

第347回例会

高良川水辺の自然観察会

米田 豊

7月22日(日)午前9時半より、筑後川発見館くるめウス主催の魚ツチング教室と共催で、百年公園横のさくら橋周辺で行われた。今回、教室の講師である橋本先生が教鞭をとられている養護学校の生徒さんも参加された。観察会のメインはやはり魚で、参加者は水の感触を楽しみ、魚採りに夢中になった。例年になく長雨が続き、水量も多く、川底も変わったらしく、魚はもちろん水生昆虫なども少なかった。小生は胴長靴を履いて深みに入り、三角網で全長60センチを超える大物のコイを捕獲した。その大きさに参加者一同感嘆し、デジカメで写していた。大きすぎてくるめウスには入れる水槽が無いとの事で、「また帰ってコイよ」と言って放流した。11時半頃にくるめウス前に戻り、橋本先生から魚、橋田会長より水生昆虫などや植物、行徳幹事より昆虫の説明がそれぞれなされた。

魚はナマス、コイ、ゲンゴロウブナ、ギンブナ、カワムツ、オイカワ、ムギツク、オヤニラミ、メダカ、ヒメダカ、カマツカ、ドンコ、トウヨシノボリの13種捕獲。



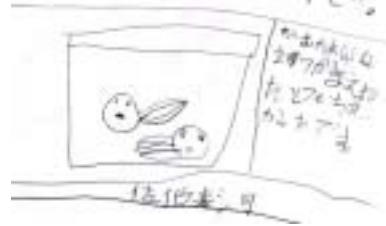
高良川で捕れた大物のコイ

水辺の自然観察会に参加した子どもたちの感想

しげまつ大せい君(原古賀町)

セミが3びきとれてよかったです。

佐伯たいが君(高良内町)



たいが君は絵を描いてくれました。

絵には「おたまじゃくしをつかまえました。とてもたのしかったです。」と書いてあります。

佐伯だいすけ君(高良内町)

高良川にこんなにたくさんの魚がいるとは思いませんでした。

佐伯ゆいさん(高良内町)

高良川にとても大きいこいがいたので、すごいなと思いました。



一生懸命に魚を追いかける子どもたち



橋本先生の魚の話聞く子どもたち

ゼロ・ウェイストと葉っぱビジネスの町上勝町

安西 妙子

8月12・13日、徳島県上勝町を訪れました。上勝町は徳島市から南西に車で約1時間の四国山脈の東に位置し、勝浦川沿いに集落が点在する人口2,050人、高齢化率48%の四国で一番小さな、最も元気な町です。



徳島県上勝町

葉っぱがお金に

この町が、全国の注目を集めるようになったのが、「彩(いろどり)」という事業。紅葉、南天、柿などの葉っぱや山野草を、料亭などで使う「つまもの」として商品化したビジネスです。

葉っぱをお金に換えているのはタヌキならぬ元気なおばあちゃんたち。彼女たちは、防災無線FAXとパソコンを駆使し、年商2億6千万円を生み出すというから驚きです。

葉っぱは軽くて、マイペースで作業ができ、こつこつと仕事をするのが得意な高齢者に最適の仕事というわけです。この事業が生きがいになり、その結果医療費は減り、福祉施設もいらなくなり、町には寝たきりのお年寄りは2人しかいないなど、いいことづくめです。

このいろどり事業の生みの親の横石知二氏曰く、「このビジネスの成功の秘訣は、おばあちゃんが多い、ゴミのないきれいな町、環境がいいという、ここにしかない資源を徹底的に生かしたことです。地域資源に目を向け、経済と環境のバランスを考えた仕組みづくりをしていくことが大事です。」

ゼロ・ウェイスト

上勝町を全国的に有名にしたもう一つの取り組みがゼロ・ウェイストという廃棄物政策です。「未来の子供たちにきれいな空気やおいしい水、豊かな大地を継承するため、2020年までに上勝町のごみをゼロにすることを決意」し、上勝町ゼロ・ウェイスト宣言を2003年9月町議会で可決しました。

この町には焼却炉も、ゴミ収集車もありません。2001年1月から一般廃棄物は町内で1箇所のゴミステーションに持ち込み、35品目分別という方法をとっています。分別が多くなると大変では？との問いには、どのブースに入れればよいかははっきりわかって逆に楽なのだとの回答に納得。遠くに住んでいる人や高齢者にもボランティアグループがしっかり取り組みを支えています。

生ゴミは上勝町のほとんどの家庭に普及している生ごみ処理器でそれぞれが自分の家で堆肥にしたり、土に還したりしています。機械の購入には町からの補助があり、各世帯1万円の自己負担で購入することができるそうです。

上勝町では、何か問題が起きたことに対して対策を講じるのではなく、根本から問題を解決するための政策に町、NPO、住民が一体となって知恵を出し合い、取り組んでいます。このパートナーシップが上勝町の元気の秘密のようです。



日比ヶ谷ゴミステーションでの35分別

《行事案内》

第349回例会:

ネイチャーゲームと自然観察会

ネイチャーゲームと自然観察をしながら、秋の自然を満喫しましょう。

- 〔日時〕: 10月14日(日)雨天中止
 〔集合・解散〕: 9:30・14:30 高良内幼稚園
 〔交通〕: 西鉄バス高良内・竹の子行きで、終点竹の子バス停下車、徒歩1分
 〔持ち物〕: 弁当、水筒、筆記用具
 〔参加費〕: 無料
 〔共催〕: くるめネイチャーゲームの会、久留米市農政部生産流通課

第350回例会:

バードウォッチングウィーク探鳥会

冬鳥たちも姿を見せ、鳥も見やすくなったこの時期は観察にとっても素晴らしい一日になると思います。秋の自然を満喫し野鳥と友だちになりませんか。

- 〔日時〕: 11月11日(日)雨天中止
 〔集合・解散〕: 9:30・14:30 高良内幼稚園
 〔持ち物〕: 弁当、水筒、筆記用具、帽子、あれば双眼鏡
 〔参加費〕: 100円
 〔共催〕: 日本野鳥の会筑後支部、久留米市農政部生産流通課

第351回例会:

秋のキノコ観察会とキノコ汁

秋はどんなキノコに出会うでしょうか。観察と、キノコ汁を味わいましょう。

- 〔日時〕: 11月25日(日)雨天中止
 〔集合・解散〕: 9:30・14:30 高良内幼稚園
 〔持ち物〕: 水筒、マイカップ、マイはし
 〔参加費〕: 300円
 〔共催〕: 久留米市農政部生産流通課

第352回例会:

冬の自然観察会とだご汁会

動植物は冬をどのように迎えるでしょうか。

- 〔日時〕: 12月16日(日)雨天中止
 〔集合・解散〕: 9:30・14:30 高良内幼稚園
 〔持ち物〕: 水筒、マイカップ、マイはし
 〔参加費〕: 300円
 〔共催〕: 久留米市農政部生産流通課

《事務局だより》

紙幅の関係で事務局だよりはお休みです。

「久留米の自然を守る会」ホームページ
<http://kurumenoshizen.net>

ホームページを新しく作り直しています。閲覧者が書き込める箇所を増やしていますので、どんどんアクセスしてください。

1. **会員消息** 入会 宮原洋子 退会 溝上澄生
2. **会費納入について**
会費は、会の活動を支える源です。まだ、会費を納入していない人は振替用紙(口座番号01750-1-40114)に年会費2000円をご確認のうえ納入をお願いします。
3. **原稿募集**
次号99号は平成20年1月1日発行予定です。原稿の〆切は12月1日です。皆さんの原稿をお待ちします。
4. **幹事会のご案内**
幹事会(定例)は原則として毎月第1水曜日の19:00~21:00まで、西町教育集会所で行います。皆さんも気軽にご参加下さい。(11月7日、12月5日)

久留米の自然

平成19年10月1日 第98号
 発行 久留米の自然を守る会
 発行者 橋田沙弓
 事務局 〒839-0827
 久留米市山本町豊田2320-6
 TEL 46-8622 FAX 46-8623(古賀)
 印刷(有)プリンティング コガ
 TEL 0944-88-0027 FAX 0944-88-0029